

幼児教育研究部 第2回研修会 教諭班

講演会

講師 常葉大学保育学部 赤塚 めぐみ 氏

演題 インクルーシブ保育におけるクラスワイドな支援

◎統合保育からインクルーシブ保育へ…「インクルーシブ保育」とは多数派や少数派の区別がなく、多様な子供の集団保育である。

～子供をどのように捉え、どのような関わり方や支援をしていけばよいのか～

- ・配慮が必要な子に対し、つまずきの場面と程度を捉えることで、教育的な支援方法が見えてくる。
- ・イヤーマフや眼鏡をつけているなどの「見える個人差」と、感覚過敏などの「見えない個人差」があり、見えない個人差は本人も周りも気づきにくい。教師は日頃から子供を観察し、発達の違いを受け止め、支援の内容や方法を考えていく必要がある。また、「見えない個人差」を子供自身が理解し、困った時に自分から発信できるように関わっていくことが大切である。
- ・「みんなが心地よく過ごせるクラス」をつくるためには、子供主体のクラス運営を意識していくことが大切である。また、子供相互の理解を促し適切な橋渡しを行うことで受容的な行動をとれるようにしていくとよい。
- ・人間関係は、一対一の安定的な関係から発展するため、クラスの中で安定したやり取りができる友達（よきバディ）を見つけられるとよい。バディとの結びつきが深まることで、他児への気づきが芽生え、クラスの一員としての存在価値に気付いていく。
- ・育ち合う集団づくりには、対話は不可欠である。その中で賛成意見だけでなく反対意見にも触れることは、折り合いをつける方法を学ぶ点から大切である。
- ・子供たちにとって、集団生活が安心・安全な場となるよう、成功体験を重ねられる環境にしていくことが大切である。

○講話を受けて（自己課題や方策、今後への取り組み方について）

- ・過剰な配慮や支援不足にならないよう、子供の表れをしっかりと観察し、発する言葉や心の声に耳を傾けることを大切にし、合理的配慮ができるようにしていきたい。
- ・配慮が必要な子に対して、個別で対応することが多いため、教師との関わりが多くなりがちである。クラスの仕組みをリフレーミングし、子供相互の理解を促しながら、子供同士がつながるクラスづくりをしていきたい。そのためには、「対話する」ことを大切にし、賛成意見だけでなく、反対意見も丁寧に扱い、安心して意見が述べられる場、遊べる場、活動できる場にしていきたい。



教諭班グループ別研修

研究テーマ 「幼児期に育てたい力」を育む環境や援助の工夫

～遊びの中にある資質・能力を読みとって～

学年別グループ協議では、様々な経験年数の教師がいることを考慮し、遊びの写真を用いて、子供の姿を読み取ることを目的とした。感じたことや捉えた姿を付箋に書き出し、「幼児期に育てたい力」に照らし合わせていくことで、どのような力が育まれているのかを再確認することができた。助言者には、グループ協議に入っただき、直接御助言をしていただいた。また、学年別全体会でも具体的な事例を用いて、直ぐに実践につながるような御指導をいただき、研修を深めた。

<3歳児>

- ・年少児の遊びの中にも10の姿が相互に関連し合い、遊びを通して様々なことを学んでいることを確認することができた。今後も10の姿を意識した保育をしていきたい。
- ・「幼稚園が安心で楽しい場所」と感じる事が大切である。そのためには、安心できる教師の存在や、好きな遊びが十分に楽しめる環境が大切であると感じた。

●助言者御指導（抜粋）

- ・グループ協議では、様々な経験年数の教師と話し合いを行うことで、新たな気付きもあるため、今回の研修はとても良い機会であった。
- ・6～7月は園生活にも慣れ、安定していく時期であるため、教師や友達と触れ合いながら、自分の気に入った場所でやりたい遊びを楽しむことが大切である。3歳児なりの遊びの姿が、この先「幼児期に育てたい力10項目」の中のどのような姿につながっていくかを、教師同士で話し合いながら感じていくことが重要である。
- ・2学期は友達と触れ合って遊ぶ楽しさが感じられる時期である。運動会などの行事にとらわれず、子供に向き合い、ねらいを達成できるように日々の保育に努めていくとよい。
- ・子供たちの肯定感を高めるためにも、教師は肯定的な言葉を使っていくことが大切である。

<4歳児>

- ・様々な体験をする中で、環境や援助を工夫し、子供の「やってみたい」という気持ちを支援していきたい。
- ・好きな遊びを十分することで、友達の遊びの姿に目を向けたり、いろいろなことを試してみようとしたりする姿につながっていくことを学んだ。
- ・年中児にとって、身近で使いやすい素材について話し合うことができた。

●助言者御指導（抜粋）

- ・写真を用いたグループ協議では、保育環境のもつ意味や個の発達に寄り添った指導、多様な子供に応じた配慮などを積極的に学び合い、資質・専門性の向上が図られた。
- ・子供の興味関心に沿って環境構成しても、子供と教師との思いのずれや、教師主導の保育になり、上手い出来ないことがあるが、教師自身の悩みや葛藤と反省は、幼児理解を深め、専門性を高める貴重な体験となる。日常の保育の課題をPDCAサイクルで展開していくことにつながるため、日々の保育の悩みを園内で話し合っ欲しい。
- ・「子供の主体性」と「教師の意図」とをバランスよく絡ませて保育を展開していくことが大切である。活動の主体は子供であり、教師は活動が生まれやすく展開しやすいように、意図をもって環境を構成することが求められる。子供の発達過程や特徴を捉え、興味関心を探り、遊びの場ではユーモアを大切に、子供と対話を楽しむことが保育の醍醐味であり、日々の丁寧な営みが質の高い保育となっていく。

<5歳児>

- ・子供の姿を読み取るグループ協議では、10の姿が互いに作用して様々な姿が育っていることが分かった。自分では読み取れなかった育ちの気付きを見付けることができた。
- ・1学期に積み重ねてきた経験を出し合い、その積み重ねから2学期の育ちの見通しをもつことができた。
- ・試したり、工夫したりして繰り返し遊ぶことができる環境を保障するために、十分な時間や場の確保と、子供の気付きにつながる教師の言葉掛けが大切だと学んだ。

<複式学級>

- ・少人数保育のため、子供同士の刺激が少ないことが課題である。教師が人的環境となり、人とのつながりを意識することや、意図的なねらいをもって関わったり、環境を準備したりして遊びを設定していきたい。
- ・異年齢の交流で刺激を受け、学ぶことも大きい。複式ならではのよさを今後も活かしたい。

●助言者御指導（抜粋）

- ・教師の指示ではなく、子供が自分から「やってみたい」と思えるような環境を整えることで学びが生まれる。子供たちの主体性と教師の意図をバランスよく絡めていき、発達に必要な経験が得られるようにしていくことが大切である。
 - ・試行錯誤して遊ぶ中で、子供たちだけでは気付くことが難しい所を、教師のつぶやきで気付かせたり、学びを促すために必要な環境を用意したりすることが大切である。一方で、興味関心に耳を傾け、思いを聞いて遊びを広げていくことや、環境の中に教育価値を含ませながら、試行錯誤する体験をさせていくことが大切である。
- 複式学級では、4歳児が5歳児に近付きすぎないように、それぞれの学年で経験させたいことを意識して保育していく。2学期に取り組む行事の中では、各学年に応じたおさえが保護者に伝わっていくことが大切である。

<預かり保育グループ>

- ・個別支援を要する子が増え、個に応じた支援方法を考えていく必要がある。
- ・午睡時間など、各園の生活の流れや工夫している取組を参考にしていきたい。
- ・預かり保育時間の避難訓練においては、実際に行った上で、自園に合った方法について話し合い見直していくことの大切さに気付くことができた。

●助言者御指導（抜粋）

- 避難訓練では、「訓練時に上靴を履いていない」「個人用防災頭巾が無い」など通常保育時と避難する状況と異なることや、預かりならではの気付きがある。全職員で様々な場面で確認し合い、情報を共有しながら課題解決に向けて進めていく必要がある。
- グループ協議の中で長期休暇中の少人数での活動に苦慮しているという意見があった。利用児が少人数、もしくは1人の場合には、個と向き合い、その子なりの目標を決め、取り組むことで、達成感が生まれることがある。
- 異年齢が混在することを踏まえ、環境や活動を考え工夫していくと、気付きや成長が見られる。異年齢の関わりの中での体験がその子の刺激となり、通常の保育に戻った時に、その子がクラスに刺激を与える存在になることもある。
- 預かり保育の家庭的な雰囲気の中で、学級では見せない姿を見せる時がある。その姿を学級担任と共有していくことが、その子の育ちを支える一助となる。

